

観点・キーワード

集団生活が苦手な発達障害児への援助を考える上で：

とうじょう めくむ 東條 恵 新潟県はまぐみ小児療育センター 診療部長

学校生活・学童保育・集団の中でうまく振る舞えていない児童を見たら、発達障害の存在を考えておくことは必要でしょう。今回はADHD児と自閉症スペクトラム児を想定し、支援上の観点と、支援内容の大枠を考えてみます。

観点・キーワード

環境調整・情報過多・過剰適応

発達障害児への援助の基本は、「環境調整」と言えます。把握・理解できる規模の家庭という小集団では、大きな問題を起こさないので。一方、把握できる範囲を超えているであろう、学校の大人数クラスでの生活場面や学童保育の大集団場面で、問題を起こしてくる児童がそれなりにいます。けれども構造化や、集団の規模を小さくするなど工夫し、適切に整えることで「問題・迷惑」行動は収

まりやすいのです。彼らは**情報過多**（指示内容や人が多すぎるなど、処理しきれない情報の多さ）のために混乱していることが多いからです。つまり環境調整の重要性です。

定型発達児・者⇨多数派は、若干無理のある環境でも適応し合わせる人が多いようです。しかし、発達障害児は余裕幅が少ないため、同じ環境でも問題を起こすと推測されます。つまり「**問題を起こすであろう環境**を**発達障害児に与えてしまっている**ことが**問題**」と周囲が認識し、配慮すべき点を考えましょう。無配慮の中で、児童が「僕はだめだ」と自己評価を下げてしまうのは人為的ミスともいえます。多数派へ用意している環境にプラスしての工夫、集団規模は小さくても情報が多すぎないか、複数の指示を同時に出していないかなどの検討が必要です。

ADHD児もですが、特に自閉症

スペクトラム児では**過剰適応**に留意すべきでしょう。一見うまくいっていると思われても、本人は精一杯張り過ぎていることが多いのです。そしてある期間後、疲れすぎて忍耐の破綻に陥ります。集団適応のエネルギーが切れた結果、パニックの起こりやすい状況や不登校に至るとい

① ADHDの児童

様々な刺激がある中で「それぞれに反応し次々に興味が移る」「一つのことに集中できない」状態に対しては、周囲の人々が努めて、情報の制限・整理を行います。また、「**枠組み**」をつくる→達成・成功したら周囲の人が評価する→評価されて本人に自信がつく」といった好循環の中で、振る舞い方の学習・練習をすることが必要です。どうすることが望まれているかを学習し、自分に枠組み・道徳的抑制をかける練習は、前頭葉機能を鍛えることになるでしょう。

② 自閉症スペクトラムの児童

情報過多状態にさらされ続けると、自ら情報をカットすることを選び、心の平和を保とうとするところが、情報の受け手である児童に起こりえます。この様子を「聞いていない」と周囲には評価されてしまいうでしょう。うまくシャットダウンできなければ情報が混乱し、フリーズ・パニックを起こすかもしれません。

情報過多の中で、必要な情報が

うまく入らないとか、部分的に入った不十分な情報で判断して動いてしまい、結果として失敗して自己評価を下げていっているのです。この悪循環を避けるには、集団規模の設定（小集団とし、サポーター児を付けるなど）をしたり、支援者側からの「事前説明」が必要です。先の見通しをつけてもらい、不安無く動けるようにしておくことが有効でしょう。

事前説明をするときには「耳から聞き取る力が弱い児童が多い」「視覚情報が入りやすい児童が多い」という特性を、上手に利用する（スケジュールや作業工程を絵と文字で説明するといった視覚支援など）ことが、適切と思われます。

具体的支援

親・大人トレーニングについて

「ゴッソ」「ばちん」といった身体的虐待や、「あんたなんか知らない」「どこかへ行ってしまうなさい」という心理的虐待で子どもを従わせようとする方法、虐待手法を使った子育ては不適切です。

児童育成の場では、さすがにこのような養育者の言葉遣いは無いと思いますが、「だめじゃないか」など、その理由を説明しないまま、頭ごなしに大人の立場を利用した発言をしてしまうかもしれません。**親・大人トレーニング**（親・大人トレ）を意識する必要があります。

親・大人トレの基本を表に掲げま

親・大人トレーニングの基本

失敗しない子育てのために考えられること

- 1 良い行動は強化したい。→ 大根役者的に大きさに「褒める」。
- 2 「問題・迷惑」行動は消去したい。→ 「無視(意識的無視)」をする。
=良い行動の出現を待って「褒め」つつ、対極としての「無視」。

*無視：後ろを向く、反応しない、その場を離れるなど、行動で示す。

*無視できないときに、親・大人側が言葉をかける手順として以下の4つ。

- ① 共感の言葉をかける。(例：あなたは○さんに怒られたから、物を投げているのね。わかったわ。)
- ② 静かに感情を伝える。怒るより涙の方が有効。(例：でもそれを見ている私は悲しいなあ。)
物を投げガラスが割れたとすると、さすがに次の段階に行くことになるが。
- ③ 優しく宣言をする。(例：私は怒りましたよ。)
(感情を激しくぶつけても、効果はないことが多い。相手がエネルギー切れであればあるほど、そうである)
(命に関係するような場面では、恐怖を感じさせる声色を使っても可と考える)
- ④ 優しく言葉で諭す。内容は、どうして親・大人が怒ったのかの理由説明や、他人はどう感じるかの説明。

- 3 「罰はある」ことを、子ども側に理解してもらう。

*罰として何を選ぶかを、状況の良いときに、お子さんと話し合っ決めておく。労働奉仕、本人の好きなことへの制限、反省部屋行きとし反省文作成などが考えられる。

- 4 「だめなことはだめ」と伝える。

*消去バースト(一時的に問題行動が増加すること)は予想しておく。そうならなくても動じない。

*実際の場面では、まず、ある程度本人の申し開きを聞く。親・大人側が納得できなければ「タイムアウト(時間切れ)」を宣言し、その後罰を受けてもらうことになる。

- 5 大人・子関係が良好な時に、前もって1~4について説明し、了解を取っておくことが必要。

した。虐待手法を用いることなく、大人側が親・大人トレのモードに切り替わることができれば、児童の反抗的・挑戦的状态は改善します。小学校低学年生の家庭生活では三〜六ヶ月で抜け出るケースが見られます。

一方、学校や学童保育といった集団の場では、親・大人トレに沿った大人側の対応を、うまく行えない場合も多々あるかと思えます。多数派の児童に対し、簡単な注意を与える・叱るなどの指導手法が容易である中で、

その中の一人を特別扱いできないと大人側が判断しがちになることが推測できます。

発達障害児には、大人や周囲に対して反抗的態度をとり続けたり、相手を逆なでする発言を持続してしまっている、本人も周囲も幸せでない状況が続きことがあります。そのようなときこそ、特に注意すべきです。何故ならば、子どもは他者の振る舞いを手本として学ぶからです。父母・大人・友達の自分に対する振る舞いを、自分も同じように模倣してよいと考えてしまうからです。親・大人トレを支援者側が学び採用すべき理由が、ここにあります。

具体的支援 集団中での対応

学校・学童保育の規模は、ADHD児・自閉症スペクトラム児にとつて大きすぎるでしょう。工夫できることを考えてみます。

① 空間の構造化

ワンフロア形式の中でも、リラックスクスできる小部屋・空間を確保しましょう。ついたて・カーテン・段ボール箱も、他人の視線や不要な情報をカットすることに役立つと思われれます。パニック時や疲れていると推測される時には、リラックスクスできる小部屋なりを適宜使うことがお勧めです。注意を与える時にも他児童の目の前で行わず、その場所を利用すれば、本人のプラ

イドを傷つけてしまうことは避けられることができます。

② 集団の構造化

無理なく適応できる規模の小集団を設定します。四人程度の活動班を作り、班ごとの活動に慣れしてもらいましょう。班内のリーダーや支援担当の児童を明確にしておきます。また発達障害児のサポーター役になれる子が班に入っていることも肝要です。

③ 時間の構造化

集団での活動の流れを、その都度「事前説明」します。先の見通しを立ててもらい、無用な不安を減らしておきましょう。

④ 視覚的構造化

スケジュール・規則は、皆が理解できるように、絵や写真・文字を組み合わせて作り、決まった場所に提示しておくことが有用でしょう。児童が規則から逸脱したときに、その都度話し言葉で注意や指摘することを避け、規則の掲示場所へ行って見てくるように伝えるのもよいでしょう。

実際の児童育成現場は、困難性を抱えた状況と理解できます。利用者の増加に比し、支援者側の慢性的人手不足があるからです。

地域の運動クラブ活動と共同での運動時間づくりや、ボランティアの手を借りた作業時間(工作・製作など)づくりなど、地域の力を取り入れる様々な工夫や努力が求められていると思えます。